

## 日本型和牛繁殖経営の美学

江田英明（JA阿新OB）

時を遡ること39年の昭和48年7月28日、東京での集合オリエンテーションを終えて羽田空港からアメリカへの1か月の研修に胸を弾ませて出発しました。

メンバーは当時の農水省農業大学校の第3期卒業生7名、サンフランシスコ経由で首都ワシントンから研修が始まりました。

畜産（和牛）を専攻していた私は、初めて見るアメリカの畜産のスケールに度肝を抜かれたことが今でも脳裏に焼き付いています。

中でも、石油王ロックフェラーの3代目が経営するアーカンソー州のウインロックファーム（牧場総面積6,800ha）で見たアングス種とヘレフォード種のフィードロットは、車で走っても走っても切れ目のない牧柵が両側に続いていました。そのあと、岩場の高台に案内され、眼下に広がるフィードロットと牧草地は想像を絶する壮大さで思わず驚嘆の声をあげました。（当時牧場へは年間25万人が見学を訪れているとのことでした。）

また、イリノイ州の加工トマト生産農場では5～6名の作業員が乗ったハーベスター数台が並んでトマトの収穫作業をしており、粗放農業とはこれかと勝手な解釈をしてしまいました。（ちなみに、この農場主の愛車はトヨタのコロナで、ちょっぴり優越感を感じたものです。）

ワシントン・アーカンソー・ウエストバージニア・イリノイ・カルフォルニアの5州に及ぶ体験が今の私に生かされたかどうか。それは私のみが知るところです。

その後、JA職員として畜産農家や耕種農家の指導の傍ら我が家の和牛繁殖と水稲・トマト栽培で38年が経過し、昨年3月にJAの定年を迎えました。

確かにアメリカの畜産は世界の食料供給に大きな影響を与え、貢献しているとは思いますが、日本の和牛の肉質は世界に誇れるものであり、限られた資源（特に水田畦畔・林間）の有効利用は理にかなっており、小規模とは言いながら、今後も営々と続いて行くものと思います。

このような日本型和牛繁殖経営には「美学」があると勝手に解釈をして、我が家の牛飼いにいそしんでおります。

BSE、口蹄疫、TPP、放射性セシウム、今の日本の畜産は自分たち一農家だけではどうにもならない難題であり、苦しんでいる畜産農家のためにも官・学・民が団結して、この難局を乗り越えてこそ、日本の畜産に明日が来るものと信じています。



高台から望むウインロックファーム